

□海外文献紹介□

消化管の末梢血管拡張症に対する内視鏡的レーザー治療

Endoscopic laser treatment for gastrointestinal vascular ectasias: Cello JP, Grendell JH (Ann Int Med 104: 352, 1986)

消化管の末梢血管拡張症は遺伝性出血性末梢血管拡張症をはじめ、心臓弁膜症や慢性腎不全患者において、また特に基礎疾患のない場合でも高齢者に認められることがある。そして、これが上部および下部消化管出血の原因ともなることが報告されている。著者らは1982年2月から1985年3月までに出血源と考えられた43例の消化管の末梢血管拡張症に対してアルゴンまたはNd-

YAG レーザーによる内視鏡的治療を行った。

患者は男性27例、女性16例、平均年齢は73歳であった。病変部位は右側結腸に最も多く、以下、横行結腸、左側結腸、胃、十二指腸の順に多かった。約90%はアルゴンレーザーを用いて、1回の内視鏡検査で治療可能であった。検査時に出血していたのは7例で、このほか5例はレーザー治療の際に出血したが、更に治療を続けることにより止血した。また平均392日の経過観察期間で22例が再出血した。これについて7例は更にレーザー治療を行い、5例は手術を行い、残りの症例は輸血、鉄剤投与を行った。

全体的にみると、レーザー治療に

より輸血必要量は有意に減少した。再出血を起こしやすい因子として、動脈硬化性心血管病患者、胃に病変がある場合などがあり、逆に右側結腸だけの病変では再出血しにくい傾向を認めた。重大な合併症は大きな病変を治療し1週後に穿孔を起こした1例のみであった。

著者らは、消化管出血を起こす末梢血管拡張症がレーザー光凝固にて安全に治療でき、輸血必要量が減少したことを示した。この治療は上部消化管より大腸で、より有効であった。今後更に、高周波電気凝固などの他の内視鏡的治療との比較検討が必要であろう。

(関東通信病院消化器内科

伊藤慎芳 抄)